

宮古の文学碑 (資料編)

仲宗根 將二

本稿は「宮古島市総合博物館紀要」18号(二〇一四・三)で紹介した「戦後宮古の文学活動 (五)」中「三、宮古の文学碑」の付編をなすものです。「三、宮古の文学碑」では主として「碑銘」概要と作者についての紹介でしたが、本稿では可能な限り「建立趣意書」並びに建立主体である「実行委員会」などを紹介することで、併せて個々の文学碑の建立への全体像が鮮明になるものと想定しています。

「句碑」は、一九七二年十一月、「無季句の旗手」とうたわれた旧制県立宮古中学校教諭・鹿児島県出身の篠原鳳作に始まって、親泊裕之(一茶まつり)、大山春明、飯島晴子、湧川新一、山田弘子、平良雅景の七基。

「歌碑」は、山内朝保、宮国泰誠、垣花良香(三基)、平良好児、仲元銀太郎、谷川健一、高澤義人、貞明皇后、昭和天皇の十一基。その後、山田弘子の娘で後継者の山田佳乃の句碑が建立されて、句碑は八基。「文学碑めぐり」などで宮古の豊かな文学的背景をも学ぶことができるでしょう。

このような文学的風土の影響もあってか、教育現場では熱心な教師らによって句作指導がなされ、全国学生俳句大会や「一茶まつり」などに入選し句碑等が建立されています。池間中は一九八〇年「一茶まつり」で団体賞など、上野中は二〇〇一年、第三一回全国学生俳句大会一位入賞、鏡原中は第八回世界子ども俳句大会で特選などです。

いわゆる文学碑とは多少趣は異なるが、敗戦後の宮古郡民を鼓舞

し再出発への気運を高揚させた「新宮古建設の歌」をはじめ、「平良市の歌」「池間行進曲」「えんどうの花のふる里」、さらには宮古を代表する民謡「宮古とーがに」「なりやまあやぐ」「シンカニ」などの碑も建立されています。

1. 篠原鳳作句碑

しんしんと 肺碧きまで 海の旅

篠原鳳作(本名・国堅)(一九〇六(明治39)・一・七生〜一九三六(昭和11)・九・一七去)、鹿児島県、一九七二(昭和47)・十一・二〇建立、平良下里・カママ嶺公園

かつて宮古中学で教鞭をとった俳人篠原鳳作の句碑除幕式が十一月二十日あさ十時過ぎから平良市カママ嶺公園で催されました。医師の平良賀計氏ら宮古中学校同窓生を中心に組織された「篠原鳳作句碑建立委員会」によって建立、故鳳作夫人前田秀子、遺児篠原正義氏をむかえて催されたものです。

除幕式には日本現代俳句協会会長三谷昭氏ら著名な俳人はじめ県内外から宮中同窓生など多数の関係者が参列、故人の業績にふさわしい雰囲気のおかげでおこなわれました。

平良賀計、平良重信(平良市長)宮国泰良(宮古支庁長)氏らの

あいさつにつづいて篠原正義氏が次のようにあいさつしました。

「鳳作が宮古島でお世話になったのは昭和六年三月から九年十月までですが、その後十一年九月に他界しております。あれから四十年近い才月が過ぎていますが、宮中卒業生を中心に毎年鳳作追悼の句会を催し、また今回沖縄の「祖国復帰」の年に句碑の除幕式ができました。鳳作はしあわせだと思っています。」

宮古島へ来て、浜辺や街角を歩いていると、まだ会ったことのない浴衣がけの父にばったりあうような気さえします。現代俳句協会長の三谷昭先生ら、また十七年前鹿児島島の長崎鼻にこの宮古島に向けて句碑をたてられた前原先生ら多くの方々、沖縄からは宮古高校の校長先生をはじめ多くの方が参列していただき私たち母子は感謝の念でいっぱいです。」

なお除幕式につづいて記念植樹、郡内観光、つづいて夕方五時半、市民会館和室で句会、七時から中ホールで祝賀パーティを催しました。秀子夫人、正義氏ら県外からの参加者は二十一日あさ空路一便で帰郷しました。 (「宮古教育時報」一九七二・十一・一二)

鳳作をたずねて

現代俳句界の異才・篠原鳳作は昭和六年三月～九年十月まで、創立まもない県立宮古中学で教鞭をとっていました。二十五才から二十八才までの青春期で、季節感にとぼしい南島の生活を通して鳳作は、いよいよ無季俳句への確信を深めていったといわれています。しかし宮古での鳳作についてはまだまだ知られていない面が多く、「句文集」にあるこの時期の年譜も必ずしも充分とはいえないようです。さいわい宮古中学時代の教え子や同窓生らによってさきごろ、カママ嶺公園に「句碑」(しんしんと肺碧きまで海の旅)が建立され、

これを契機に鳳作を掘りおこそうとするひそかな胎動がはじまっています。鳳作の足跡をたずねることはまた、この島の文芸活動にあらたな気運をそえるものであり、もっともつとだいにされなければならぬ——このように強調するこえがきかれるゆえんでもあります。

(「宮古教育時報」一九七二・十二・九)

賑わった「無季句の旗手」鳳作展

「しんしんと肺碧きまで海の旅」などの作品で「無季句の旗手」と嘱望されつつも天逝した鹿児島出身の「俳人 篠原鳳作の世界」展は、十一月二十四日～十二月三日、平良市立図書館で催されました。参観者四九六六。一九二九(昭和四)年三月、東京帝国大学法学部を卒業した鳳作(本名・国堅)は、創立間もない県立宮古中学に一九三一(昭和六)年三月赴任、三四年十月迄の三年半、公民と英語を教授、時には美術を担当するなど、一期七期生まで教えています。大学時代から俳句を始め、卒業後に本格化した、四季の変化の乏しい宮古に来て、無季句への志向を深めたと伝えられています。いわば宮古は鳳作の無季句への開眼の地とも言えるようです。

市立図書館では、「鳳作の会」(上地照子代表)の全面的な協力を得て開催したのですが、鳳作の会の主力メンバーである友利昭子、池間キヨ子、池田俊男氏らは、二〇〇二年十一月、平良市熱帯植物園に「飯島晴子句碑」建立と併行して数年来「鳳作展」開催に必要な資料収集に尽力していたものです。展示資料のほとんどは鳳作の長男、篠原正義、甥の篠原寿宏、鳳作の宮古中学時代の同僚・故慶徳健の長男、一彦、平良賀計医師、砂川寛亮氏らの協力で集められたものです。

展示は篠原鳳作年譜、写真でふりかえる鳳作の姿・俳句二十五選、旧制宮古中学校時代の鳳作、父・篠原鳳作について、カママ嶺公園に鳳作の句碑の建つまで、鳳作関連書籍・新聞資料等、宮古の俳句の今、鳳作展記念吟行会、作品展示・宮古の句碑マップ、以上九つの領域で公開されました。

開幕初日には、伊志嶺亮平市長、久貝勝盛同教育長、上地照子鳳作の会代表によるテープカットがおこなわれ、三氏がそれぞれあいさつしました。俳人でもある伊志嶺市長は「鳳作が亡くなってしまつて七十年になるが、鳳作の世界展が開催されることをうれしく思う。昭和六年から三年半の宮古での生活で鳳作の新しい俳句が生まれた。鳳作を愛する宮古の人たちが熱意をもって開く“俳人 篠原鳳作の世界”展を機会に、俳句を愛する人たち、とくに児童生徒の俳句人口が増えることを期待している」と祝辞を述べていました。

なお「鳳作の会」では、初めての鳳作展を記念して吟行会を催しており、開会式で表彰もおこなわれました。入賞者は次のとおり。

選者は、真栄城いさを氏。鳳作賞Ⅱ池間キヨ子「神の留守 鳳作の海黄濁し」、碧海賞Ⅱ安田久太郎「色鳥の碧の一字さ落しけり」、海の旅賞Ⅱ友利昭子「鳳作の丘にて風を聴くばかり」、竜舌蘭賞Ⅱ砂川孝子「鳳作の句碑へ行く道花つるぼ」、浜木綿賞Ⅱ渡久山和子「霜降の句碑の目覚める音のあり」、さしば賞Ⅱ辻泰子「公園のほゞ中央や新松子」

『宮古郷土史研究会会報』一四六号、二〇〇五・一・一四

篠原鳳作句碑除幕式への御案内

昭和の初期、宮古中学校に於て教鞭をとられ、宮中男子に大きな感銘を与えた篠原先生は、一方で日本の俳句界に篠原鳳作時代を築い

た作家であります。この度先生の遺徳を後世に伝えるため、句碑を建立、下記により除幕式を行いますので、関係各位の御参列をお願い申し上げます。

記

除幕式 〔1972〕11月20日 午前10時 於 かまま嶺

懇親会 〔遺児正義氏等を囲んで〕、11月20日 午後7時 於

市民会館中ホール

◎懇親会の会員券は市役所商工観光課にてお求め下さい。

昭和47年11月16日

主催 篠原鳳作句碑建立委員会

共催 平良市役所、平良市教育委員会、南沖縄新聞社、宮古新

報社、宮古毎日新聞社、宮古俳句会、宮古文化放送社、

宮古観光協会

2、大山春明句碑

藍の香を 桜のおこしけり 機始め

大山春明（虹石）、一九一七（大正6）・八・八生〜一九八八（昭和63）・五・一五去、平良・東仲宗根、一九九三（平成5）・五・一六建立、句は一九八四年、沖縄県俳句協会主催・新年大会での県教育長賞の受賞作。始めは宮古神社境内、のち上野・野原、宮古織物工芸センターに移る。

大山春明句文集発刊及び句碑建立趣意書

大山春明さんが惜しまれてその生涯を閉じられてから数年、知人、

友人の間でことあるごとに遺稿集発刊が話題となって来ました。しかし惜別の痛みに耐えておられる御家族に、遺稿の蒐集等繁雑で事務的なことをお願いすることがはばかられて、これまで持ち越しになっていきます。来る一九九三年五月十五日は春明さんの五周忌に当たります。そろそろ春明さんの残された多くのエッセイや俳句等を、郷土を愛し文学を愛し家族を愛した一人の人間の足跡として、纏めても良い時期にきているのではないのでしょうか。そして出来得れば故人らしい地味な句碑を、何処か春明さんにふさわしい場所を選んで建てたいものだと思います。

つきましては、左記により「大山春明句文集」を発刊し、「大山春明句碑」を建立致したいと思しますので、何卒御賛同の上御協力下さいますようお願い申し上げます。

・大山春明略歴

一九一七（大正 6）年八月八日生（平良市東仲宗根）

一九三五（昭和 10）年三月 県立宮古中学校卒

一九三八（昭和 13）年〃四二（昭和 17）年 現役兵として入隊

一九四二（昭和 17）年十二月 宮古島測候所勤務

一九四四（昭和 19）年三月 中央気象台附属気象技術官養成所専修科卒

一九六九（昭和 44）年〃 エッセイストクラブ「青潮の会」並びに「宮古俳句会」に所属し、地元紙に作品を発表する

紙に作品を発表する

県紙俳壇に作品を発表する

宮古郷土史研究会の結成にくわわる

一九七五（昭和 50）年四月 「風」に入会

四月 石垣島にて「おもと句会」を発足さ

せる

一九七八（昭和 53）年四月

五月

石垣島地方気象台高層課長を辞す
国家公務員宿舍城間住宅管理人、沖縄エッセイストクラブに属し県紙等にエッセイを発表

一九八六（昭和 61）年

篠原鳳作没五〇周年全国俳句大会で入賞の他県紙俳壇春季夏季俳句大会にて受賞

一九八八（昭和 63）年五月十五日没

・（所属）俳句誌「風」会員、沖縄エッセイストクラブ会員、「郷土文学」

一、事業計画

イ、句文集発行、ロ、句碑建立、ハ、祝賀会開催

二、募金要項

イ、目的 大山春明氏の文学的足跡を明らかにし、郷土の文学的發展に資する

ロ、目標額 二〇〇万円

ハ、期間 一九九三（平成 5）年一月〃三月末日

ニ、払い込み方法（略）

・大山春明句文集発刊及び句碑建立実行委員会

会 長 糸数金五郎

副会長 真栄城 功

事務局長 伊志嶺 亮

実行委員 高嶺 長二・砂川 幸夫・友利 敏子・

仲宗根將二・與那覇武治

顧問 平良 好児
事務局 伊志嶺 亮・仲宗根將二・砂川 幸夫

3、飯島晴子句碑

残り鷹 鳴くを聞きあふ 一会かな

飯島晴子 一九二一(大正10)・一・九生〓二〇〇二(平成12)・六・六去、京都府、二〇〇二(平成14)・十二・二八建立、宮古島市熱帯植物園

飯島晴子句碑建立趣意書

俳人飯島晴子は平成十二年六月六日に亡くなりました。そして三年、飯島晴子の俳句作品は、ますます俳壇において輝きをまします。純粹に俳句と向き合い格闘してきた真の文学者としての生き方が、雑念の多い現代の人々に深い感動を与えているからです。毎日新聞に掲載された宇田喜代子氏の追悼文も、飯島晴子の人と文学を語り、感慨深いものがありました。あらためて紹介します。

―飯島晴子の名にまみえて以来ほぼ四十年の歳月、飯島さんがいるということと何となく安堵する気分を支えられてきた私に、その死は名状しがたい多くの問いをつきつけた。明晰な句や論を展開しはじめた昭和四十年代頃から、なくてはならぬ俳人の独りとして存在が明らかになった五十年にかけて、飯島晴子はもっとわかりやすい俳人のひとりとして先行してきた。…作品と平行して書かれた評論もまた、論理のたて方たしかな批評精神で読むものに多くの示唆を与えてきた。にぎやかなことの多いいまの俳壇にあって、飯島晴

子は華美なところに出ることもなければ群れを作ることもなく、最後まで一俳人に徹した日を過ごしてきた。自分にうつとりすることなく、現場や状況を的確に見据えた場所から発する表現活動は、折からの高度経済成長の世に乗じてうきうきはなやぎはじめた俳句に警鐘を鳴らす役目を果たしてきた。その飯島晴子がいなくなってしまうのだ。しずかな存在であつたにもかかわらず、その死は現代の俳句の一角が崩れたような大きな欠落感をもたらした。―

飯島晴子は昭和六十二年に、平良市民総合文化祭の講演と句会のために、宮古を訪れています。その折、平良市熱帯植物園にイヌマキの記念植樹をいたしました。以来、宮古に寄せる思いは熱いものがありました。「宮古島は遠く離れておりまして、特別の土地でございませう」「いつも宮古島を近く感じております」「私がこの世にいたなくなっても、(イヌマキが)枯れたり、風に倒されたりすることなく成長して欲しいと思っています。」と便りにしたため、いくつかの宮古に関する文章も発表しています。

その飯島晴子の宮古に寄せる思いと足跡を記念すべく、この度「飯島晴子句碑」を建立することにしました。ご遺族の後藤素子さんも、「母が心を寄せていた宮古島に句碑が建つことは素晴らしいことです」と喜んでおられます。

宮古は俳句にゆかりの深い土地です。藤原鳳作のゆかりの地であり、島中に俳句の息吹きが満ちています。二〇〇〇年には「日独子ども俳句サミット in 宮古島」も催しています。ここに飯島晴子という稀有な俳人の句碑を建立することは、宮古の子供たちに、またこの地を訪れる人々に爽やかな感動を与えるものと確信します。

なにとぞ、多くの市(郡)民はもとより県内、県外の俳句に心を寄せられる皆様方が、この趣旨にご賛同くださり、ご協力賜ります

ようお願い申し上げます。

・飯島晴子のプロフィール

大正十年 京都に生まれる

俳人。「鷹」同人。句集「蔵手」(第一句集)、「朱田」(第二句集)、

「飯島晴子句集」、「春の蔵」(第三句集)、「花木集」、「八頭」(第四句集)、「自解一〇〇句選 飯島晴子集」、「花神コレクション」[俳句]「飯島晴子」、「儂々」(第六句集)、「平日」(第七句集)、評論「葦の中で」(第一評論集)、「俳句発見」(第二評論集)、その他共著多数

平成九年「蛇笏賞」受賞、詩歌文学館賞選考委員

平成十二年 死去

・事業計画…句碑建立、除幕式及び祝賀会 平成十四年十二月二十八日(土)

・募金要項…目的：飯島晴子句碑建立、対象…全国、期間…平成十四年十月～十二月十日まで、振込み金融機関(略)

・飯島晴子句碑建立実行委員会

会 長 伊志嶺 亮

副会長 仲宗根将二、池間キヨ子

事務局 友利 昭子、池田 俊男、岡 恵子

実行委員 伊集紀美子、大城 健、大山 高春、親泊 宗正、

東風平紀子、新城美津枝、洲鎌 典政、砂川 明、

平良 雅景、立津 精一、立津 和代、照屋よし子、

徳嶺恵美子、友利 敏子、前川千賀子、三島 信子、

宮川 耕次、本永 清、本村 隆俊

「飯島晴子句碑」建立

一九八七(昭和六十二)年十一月、第十四回平良市民総合文化祭に招かれ、記念講演と句会に参列した俳人・飯島晴子の句碑建立除幕式が旧ろう二十八日熱帯植物園で催された。表面の句は「残り鷹鳴くを聞きあふ 一会かな」である。

句碑建立については、二〇〇一年八月伊志嶺亮平良市長はじめ、俳句同好の有志らによつて「篠原鳳作記念資料室設置」並びに「飯島晴子句碑建立」準備委員会が発足、翌二〇〇二年十月、正式に実行委員会を発足させて広く県内外に寄付をつのつていたもの。事務局は友利昭子、池田俊男、岡恵子さんが担当、諸準備ととのい、十二月二十八日の除幕となったものである。除幕式当日は故飯島晴子の娘後藤素子さん(横浜在住)も出席、伊志嶺亮実行委員長あいさつ、親泊宗正平良市教育長、立津精一同文化協会長の祝辞につづいて、「母飯島晴子を語る」で、句碑建立の喜びを語った。このあと現場で交流会が催され、新城悦子さんらが歌を披露した。

なお、碑文には宮古を詠んだほかの「聾ひて宮古上布の砧打つ」「藍滲む宮古上布の砧盤」「洗骨の泉にふるへ秋の蝶」「風葬の岩棚秋の日を刺す」の四句も刻まれている。揮毫は池田俊男氏。

(「宮古郷土史研究会会報」一三四号、二〇〇三・一・一〇)

4、湧川新一句碑

行幸啓 待つ磯香の地 年始湧く

皇后歌碑 かしこみて園 春を待つ

湧川新一、二〇〇四(平成16)・四・二三建立、国立療養所宮古南

静園構内

比嘉賀雄（宮古南静園） 行幸啓・パート3 記念句碑と記念樹

早いもので1月25日の行幸啓から4ヶ月になろうとしています。この宮古島全体が湧いた歴史的な出来事をいつまでも忘れないで記憶に留めるためにはどうしたらいいかと園と入所者自治会の皆さんと話し合った結果、記念句碑を建立し記念樹（桜）を植えることになりました。記念句碑は納骨堂の前と貞明皇后御歌碑の前の2ヶ所に建立し、4月23日に除幕式をしました。俳句の作者の入所者のS・Wさんは目をご不自由で直接句碑を見ることは出来ませんが大層喜ばれました。記念樹（桜）は納骨堂の前に植え、5月18日に鋤入れ式をしました。スクスクと大きく育っていくことを願っています。この記念句碑と記念樹が入所者、職員の安らぎの場所となり、園を訪れる皆様の眼を楽しませ、行幸啓の思い出の場所になることを願っています。

記念句…その1「行幸啓 待つ磯香の地 年始湧く」

記念句…その2「皇后歌碑 かしこみて園 春を待つ」

（「宮古地区医師会だより」二一八号、二〇〇四・五・一七）

5、山田弘子句碑

蒼海へ 鷹を放ちし 神の島

山田弘子 一九三四（昭和九）〜二〇一〇（平成22）・二・七去、兵庫県、二〇〇五（平成17）・二・五建立、平良下里・カママ嶺公園

山田弘子句碑建立趣意書

俳人山田弘子は、一九九九年四月に初めて来島されました。そのきっかけは、弘子さんの主宰する「円虹」（子ども俳句欄）に入選した、宮古の子どもたちの伸び伸びした俳句に感動し、この子ども達の住んでいる宮古島を一目みたい、その思いを強く抱き訪れます。

以来、年に二、三回は訪れ、大人や子ども達を対象にした俳句教室や俳句会などを現在も続けています。これまでの主な活動としては、一般を対象にした俳句講座「俳句を楽しむ」（市中央公民館）や句会、小・中・高の教師を対象にした「子どもの俳句を語る会」（北中図書館）、小中学生向け「子ども俳句教室」、PTA主催「親子俳句ing（ハイキング）」講師などが挙げられます。

中でも二〇〇〇年「主要国首脳会議九州・沖縄サミット」開催を記念として行われた、「日独子ども俳句サミットin宮古島」（同年六月開催）では、大会のきっかけを作り、選者・アドバイザーとして深く関わりました。子ども達の俳句作品はドイツや日本全国から数多く寄せられ（当日の大会にはドイツ国からも参加して交流を深めた）、国内外から高い評価を受けました。弘子さんの宮古を愛する深い思いが大会の成功に繋がったといえます。

この思いは、最新（二〇〇三年発行）の句集の名前（『草蟬』）にもつけられました。弘子さんは、その句集のあとがきで「この度の句集名『草蟬』は、私が度々訪れます南の小さな島、宮古島の草むらに棲息する、体調2cmほどの小さな蟬の名から取りました。（中略）この島へ年に二、三度通い、子供たちやその父母たちと共に俳句を楽しみます。そして、ここを訪れる度に私は魂を癒やされて戻るので」と書かれています。宮古は弘子さんのライフワークとなりつつある、と言う人もいます。

紹介したようなこれまでの活動と人柄は、「宮古に山田弘子さんの

句碑を建てよう」という声の高まりとなっています。この度の句碑建立は、そのような多くのみなさんの声に応えるべく進められたものです。

宮古は近年、俳句の関心が高くなっています。このような時に、弘子さんの句碑を建立することは俳句文芸のすばらしさと、俳句の目を通して見た宮古の良さを多くの方が再発見する機会になると考えています。

出費多難な折りとは存じますが、なにとぞ趣旨に賛同していただき、御協力賜りますようお願い申し上げます。

山田弘子のプロフィール

昭和九年 兵庫県に生まれる

「円虹」主宰 NHK「俳壇」選者

ホトトギス同人

日本伝統俳句協会監事

国際俳句交流協会理事

兵庫県文化賞受賞

句集『蜚川』『こぶし坂』『懐』『春節』『草蟬』自解句集『夜光杯』

句文集『空ふたつ』、共著『よみものホトトギス』

〈事業計画〉

○日時：平成十七年二月五日（土）午前十一時～

○内容：句碑建立（カママ嶺公園）、祝賀会、句会

〈募金要項〉 一口千円

○目的：山田弘子句碑建立

○締切：平成十七年二月一日

○振込み金融機関（略）

（句碑に刻む句）

蒼海へ

鷹を放ちし

神の島

宮古島山田弘子後援会

会 長 伊志嶺 亮

副会長 奥浜 善弘、立津和代

事務局 池田 俊男、新城美津枝、謝敷 勝美

実行委員 上地 照子、照屋よし子、友利 昭子、砂川 純一、

高里 廣子、川満 京子、亀川 冴子、池田きみえ、

山里 賀徳、南風原末子、渡真利房子、菅波 正憲、

垣花 茂子、池田 健盛

「山田弘子句碑」除幕

句誌『円虹』を主宰する俳人・山田弘子さんの句碑が二月五日平

良市下里・カママ嶺公園の市街地を見おろす小丘に建立されました。

池間中、鏡原中、上野中などの児童生徒らの句碑を別にすると、宮

古では篠原鳳作、大山春明、飯島晴子につづく四つめの句碑です。

俳人山田さんは兵庫県出身。阪神・淡路大震災の年に『円虹』を

立ち上げ、本年十年の節目を迎えます。宮古との関わりは『円虹』

の「虹の子俳句欄」にて伸びやかな俳句を寄稿する子どもたちの住

むミヤコとはどのような地なのか、との思いがつのつて一九九九年

四月、初めて来訪された由。以来毎年二度、三度と訪れ、句作の指

導、講演、句会を開いてきています。さきの「沖縄サミット」のさいには、国際俳句交流協会理事という立場もあつて、「日独こども俳句サミット in 宮古島」にも尽力しています。

句碑表面には自筆の「蒼海へ鷹を放ちし神の島」が刻まれ、裏面には、略歴のほか「伝統俳句の骨法に無碍自在なる精神がダイナミックスに息づく」と評される俳人 山田弘子 七年前宮古島に『俳句の種』を撒く 毎年通い 水を遣り 肥料を与え続けている 今真太陽（マティダ）の島は俳句の島になりつつある」と刻まれています。

除幕式には、兵庫県からも大勢の関係者が出席、奥浜善弘甘露寺住職の読経のあと、伊志嶺亮後援会長あいさつ、久貝勝盛平良市教育長祝辞のあと、山田さんが「句碑を宮古の地に建てていただいて感謝している。句碑は私の魂の一部。命ある限りこの島との縁を今後とも大切にしていきたい」とあいさつしました。記念植樹があつて、ひきつづき句碑を囲み祝賀の宴も催されました。

なお午後からは、下地利幸氏らの案内で、島尻元島を皮切りに島尻漁港から大神島を望み、ついで大和井、ウプカー、ぶばかり石、仲宗根豊見親の墓、漲水御嶽、石畳道など、「平良綾道」を歩いて、吟行会が催され、ひきつづきマリンターミナルで句会も開かれています。（「宮古郷土史研究会会報」一四七号、二〇〇五・三・一〇）

6、平良雅景句碑

風に乗る ほかなし島の はぐれ鷹

平良賀計（雅景）・医師、一九二二（大正11）・一〇・一二生〜二〇一三（平成25）・六・十一去、平良・西里、二〇〇九（平成21）・

十一・二〇建立、平良下里・カママ嶺公園

「平良雅景句碑」建立趣意書

医師で俳人である平良雅景（本名賀計）氏は、一九三五（昭和十）年宮古中学（現宮古高校）に入学した。前年十月、篠原鳳作（当時は雲彦）は宮古中学の教員生活を終えて鹿児島に帰っているが、雅景少年は自宅前の通りを朝夕往来する鳳作を憧れをもって眺めていたという。「先生は痩せ型、長身色白で純白な夏服にカンカン帽、一見弱々しい体格でしたが、その温顔には思索的な、鋭い、それでいて孤独な寂しさが見られました」（『篠原鳳作の周辺』一九八二）。長じて、「私が俳句を学ぶようになって、先生の『海の旅』の作品に驚き、いまさらのように、少年の頃の雲彦先生の温顔がまぶしく思い出されます」と、述懐している。

鳳作との縁は次へとつながっていく。一九七一年、サンケイ俳句全国大会で「障子洗う四角に走る水たわし」が現代俳句協会長三谷昭特選となり、現代俳句協会員に推薦される。さらに同年「蛤焼く汐の香焦がし塩こがし」を三谷昭より賞賛され、雅景氏をして宮古に「篠原鳳作句碑建立」へと駆り立てる。ついに一九七二年十一月二十日、カママ嶺公園に三谷昭揮毫による「しんと肺碧きまで海の旅」の句碑が建立され、宮古の文化史における大きなエポックとなった。以後、この句碑は宮古の俳句興隆、文芸興隆のシンボルともなっており、雅景氏の功績は大きい。

また戦後平良の町に開業した雅景氏の平良医院は宮古の文化活動の拠点の一つでもあった。一九四六年三月、平良好児の「文化創造」創刊、同年十二月の宮古文芸協会発足、「文芸旬刊」発刊、「宮古俳句会」例会、これらは平良医院の診療所を梁山泊として産声をあげ

た。こうして一九五三年慶応大学医学部精神神経科へ入局するまで、陰から宮古の若き文化人たちを支えた。戦後宮古の文芸活動の百花斉放のこの時期は宮古の文化の黎明期であり、そこでの雅景氏の存在を忘れることはできない。

俳人としての雅景氏は一九五九年、那覇市に設立した精神神経科天久台病院内に句会を発足させて、院内句誌「花風」を創刊し、定例会、吟行会、「鳳作忌」句会などを催し、活発に活動していく。横山白虹、石原八束、楠本憲吉、上村占魚、沢木欣一、細見綾子各氏の指導を受けて、「実に伸びやかでふだんの心そのまま優雅」（岸本マチ子）な作風を築き、沖縄県俳句界の重鎮としてその存在の大きさをいよいよ示すこととなる。二〇〇三（平成十五）年沖縄県現代俳句協会会長として六月二十三日沖縄「慰霊の日」の「沖縄忌」俳句大会を創設し、二〇〇八年の第六回まで大会委員長としての重責を担ってきた。このことが「沖縄忌」を季語として全国的に定着させ、沖縄の地から全国へ平和希求を発信し続けることとなった。

二〇〇五年、氏は俳歴五十年の集大成として、句集『はぐれ鷹』を上梓された。五十年めにしての第一句集である。毀誉褒貶にこだわらず飄然と人生を歩み続けておられ、句柄も人柄も優雅に気品あふれている。

本年は天久台病院開業五十周年にあたるという。この年に雅景氏の愛してやまないふるさと宮古の地、カママ嶺公園の「鳳作句碑」の傍らに「雅景句碑」を建立し、その業績を永く後世に残したいと願っている。碑に刻むべき句は「風に乗るほかなし島のはぐれ鷹」である。島を飛び立った一羽の鷹は大いなる仕事を成し遂げ世界を旅し、再びふるさとに舞い降りた。これからは島の風に遊び島番鷹スマバシダカ

として島を見守る。雅景氏が敬愛する篠原鳳作につながるロマンはここに結実することになるう。

俳句に心を寄せられる皆様はじめ、多くの市（県）民がこの趣旨にご賛同くださりご協力賜りますようお願い申し上げます。

・平良雅景たいらがけい プロフィール

医師、俳人

一九二二（大正十一）年十二月十日生まれ、平良字西里出身。

現在那覇市天久在住

一九四四年 台北帝大医学専門部卒

一九五三年 慶応大学医学部精神神経科入局

一九五九年 精神神経科天久台病院設立

現在医療法人天仁会同病院会長

二〇〇三年 沖縄県現代俳句協会会長（〇八年）、「沖縄忌」俳

句大会実行委員長（第一回～第六回）

二〇〇五年 句集『はぐれ鷹』上梓

NHK全国俳句大会草間時彦「特選」、サンケイ全国俳句大会三谷昭「特選」など多数、第十回平良好児賞受賞

・事業計画

一、句碑建立（平成二十一年十一月二十日予定）、二、冊子作

成、三、除幕式

・募金要項

目的：平良雅景句碑建立、期間：平成二十一年八月十四日
～十月三十一日、金額：一口千円（複数口可）、振込み金融機
関（略）

・平良雅景句碑建立実行委員会

会 長 伊志嶺 亮

副会長 真栄城いさを、仲宗根將二、池間キヨ子

実行委員 池田 俊男、市原千佳子、上里 忠正

嘉陽 伸、岸本マチ子、佐渡山政子

友利 恵勇、友利 敏子、仲間 健

三島 信子、本村 隆俊、山里 賀徳

事務局 井上 綾子、上地恵美子、宮川 耕次

友利 昭子

7、山田佳乃句碑

神々の 高さに鷹の 光りをり

山田佳乃 一九六五（昭和40）～、大阪府、二〇一五（平成27）・

十一・二四建立、平良下里・カママ嶺公園

山田佳乃句碑建立趣意書

宮古島に「俳句の種」を播き、育てた俳人・山田弘子を俳句の師とし母とする、山田佳乃の句碑がカママ嶺公園に建立されることになりました。

宮古島における佳乃の活動は、年2回の春・夏「子ども俳句吟行会」や句仲間への指導を弘子から継承し、親子二代にわたって宮古島と関わり続けて、十六年の年月を重ねています。

佳乃は、平成二十四年五月「俳句甲子園」県予選大会に県立宮古高校が参加するのに伴い、神戸から同校を訪れ俳句教室を開きました。また、平成二十七年八月には福嶺小PTA主催「親子俳句教室」の講師をするなど、俳句指導の場を新たに広げています。

近年の宮古島の子どもの俳句熱の高まりには、目を見張るものがあります。平成二十六年NHK「全国俳句大会」ジュニアの部での特選入賞をはじめ、全国一茶まつりやその他の俳句大会での入賞等の活躍があります。

また、学校現場においては、宿泊学習のプログラムに「俳句教室」を取り入れる小学校や、総合的な学習の時間での「宮古島の句碑めぐり」の実施、生徒会委員会の主体的な企画で「校内俳句大会」を毎月開催している学校等、俳句における意欲的な動きが見られます。これも偏に、山田弘子・佳乃親子の長年にわたる宮古島への熱き思いと、関係各位のご理解・ご尽力の賜物であると考えています。

この度の句碑建立は、山田佳乃のこれまでの俳句指導に対しての

顕彰と、宮古島の俳句文芸のさらなる興隆を図ることを目的にしています。

つきましては、本市における市民をはじめ、広く県内外の皆様にご趣旨に賛同していただき、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

・山田佳乃プロフィール

昭和四十年 大阪に生まれる

平成十三年 山田弘子に師事

平成十七年 稲畑汀子、稲畑廣太郎に師事

平成二十年 「ホトトギス」同人

平成二二年 第二一回日本伝統俳句協会賞受賞、母、弘子逝去により「円虹」主宰を継承

現在 日本伝統俳句協会監事、大阪俳人クラブ理事

句集 『春の虹』

編集代表 『山田弘子全句集』

・事業計画

句碑建立（カママ嶺公園）、小宴、句会、記念講演、吟行会、子ども俳句コンクール

平成二十七年十一月二十四日午前十時～十一時

・募金要項

○目的…山田佳乃句碑建立

○対象…全国 一口…千円

○締切…平成二十七年十一月十日

○振込金融機関（略）

（句碑に刻む俳句）

神々の 高さに鷹の 光りをり 佳乃

・山田佳乃句碑建立実行委員会

会 長 伊志嶺亮

副会長 奥浜善弘、砂川純一

事務局 池田俊男（事務局長）

立津和代、新城美津枝、池田きみえ（会計）

実行委員 山里賀徳、富村敦子、山口美津栄、内嶺文子

8、山内朝保歌（石原雅太郎顕彰碑）

白川田のつきせぬ水に咲きかおる

名をしたたえむ諸人ともに

山内朝保 一九〇四（明治37）・八・九生～一九八六（昭和61）・八・四去、平良・下里、一九六六（昭和41）・七・一建立、平良白川田水源

顕彰碑、歌・山内朝保、書・池村恵祐、刻・金城棟忠、設計・下地玄信、工事施行・金城英吉

・頌

宮古島上水道創設者石原雅太郎氏の偉大なる業績を永遠に顕彰するため讃歌を捧げここに碑を建立する

一九六六年七月一日

宮古島上水道組合管理者

真 栄 城 徳 松

書 池 間 昌 彦

刻 金 城 棟 忠

・「讃歌」作者の言葉・山内朝保

石原市長さんの時代に平良市の三大事業が実現した、その中には水道事業もふくまれていて、これが今日の水道組合設立の基盤となったことは申し上げるまでもない、さきに私達は石原雅太郎さんの市長時代の功績を称え子孫になく伝えるために胸像の建立と石原雅太郎伝の発行を企画し、会員の一人として私もこの事業に参加した、水道組合が石原氏の水道に対する功績を称える歌を一般から募集するというのが決まった時、この讃歌だけはどうしても私が歌いあげねばならないと心に誓った、それ以来私は毎日のように、このことで考えつづけた。道を歩きながらも、この三十一文字をひねくりまわした、白川田、白川田と何百回となく口のなかで口吟みあ々でもない、こうでもない語呂はどうか讃えるのに適当なピタリした言葉はないかそして島人が共々に感謝の意をすなおに表現するには：と考えるあぐねた。そして石原氏の功績を心から敬慕している私は、ある日曜のあさ、家を出て新聞社へ向う途中もこの讃歌の

ことを考えつづけた、丁度新聞社へたどりついた時、あの歌がスラスラと口吟まれてきた、これなら大丈夫と思い応募した。これが「白川田のつきせぬ水に咲きかおる、名をしたたえむ諸人ともに」という歌でした、この歌が長く石原氏の功績をたたえる歌として顕彰碑に刻まれたことを無上の光栄とし喜びとするものである。

顕彰碑建設審議委員会

山内朝保・宮古毎日新聞社社長、平良定英・南沖縄社社長、吉村玄得・平良市市民課長、平良栄賢・宮古観光協会事務局長、小禄良雄・上水道組合助役、伊志嶺恵典・上下水道組合収入役

顕彰碑建設経過の報告 助役 小禄良雄

一九六五年七月一日付を以て宮古島上水道組合が設立し平良市、城辺町、下地町及び上野村の全住民が同一条件の下に水道の恩恵に浴することが出来る喜びは、宮古に於ける水道の創設者石原雅太郎先生への報恩感謝の念と変り、その功績に報いるため顕彰碑を建立し子々、孫々に伝えると共に我々の子弟が先輩に続く決意を新たにす教えの一助ともなればとの願いをこめて一九六五年一月二五日の組合議会に顕彰碑建立の議を諮った処万場一致で議決しましたので一九六六年一月二〇日顕彰碑建設審議委員会を設置し、讃歌、頌、石材及び設置場所等の調査選定について管理者の諮問機関として委員に山内朝保氏、平良定英氏、吉村玄得氏、平良栄賢氏、組合側から助役、収入役を任命して準備を進めたのであります。設計は本組合工務課があたり石材は自然石を用いることにしました一九六六年一月讃歌を公募した処石原先生の功績を讃え、その人柄をしたう真情あふるる歌四一点が応募した中から厳選した結果宮古毎日新聞社長山内朝保氏の歌が住民の感謝の気持ちを率直に表現したものと

して選定し、書は宮古図書館長の池村恵祐氏に、讃歌を宮古高等学校教諭の池間昌彦氏に頒をお願いしました処心良く御引き受け下さいました。

石材は顕彰碑にふさわしい立派な自然石が那ハ市小緑の宇栄原山で見つかりましたので那ハ市松尾の金城棟忠氏に彫刻を依頼し、工事は金城英吉氏が請負い一九六六年一月一二日着工し本年一月二〇日しゅん工したのであります。この工事に要した費用は石材及び彫刻に三七〇ドルで工事請負費が五二五ドル合計八九五ドルとなつて居ります。昨年一月二〇日に建設審議委員会発足以来工事しゅん工まで満一年を要して居ますがその間指導、助言して下さいました請負業者の方々、工事直接携つて下さいました請負者、讃歌を寄せて下さった方々、書をお書き下さいました方々、その他直接間接にご支援下さいました方々に厚く御礼申し上げます工事の経過報告と致します

一九六七年二月三日

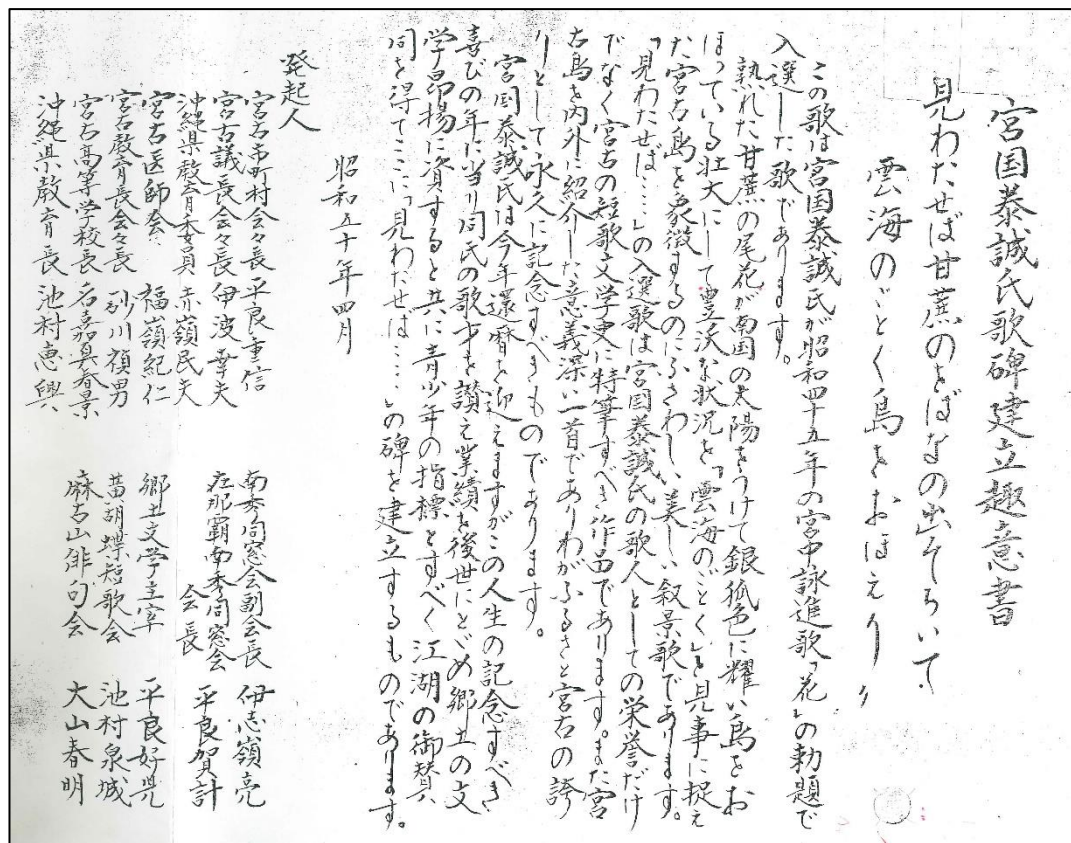
(宮古島市上水道組合「石原雅太郎顕彰碑建立記念誌」一九六七・二・三)

9、宮国泰誠歌碑

見わたせば 甘蔗のをばなの 出揃ひて

雲海のごとく 島をおほへり

宮国泰誠 一九一五(大正4)・4・26生〜一九九二(平成4)・三・二三去、平良西里、句は一九七〇年「宮中詠進歌・題「花」の入選作」、一九七五(昭和50)・一〇・二六建立、宮古島市熱帯植物園



10、垣花良香歌碑 1

かすみ立つ 島の高嶺に のろしあげ
就職にたつ 船の子励ます

垣花良香 一九〇六（明治39）・六・一四生、多良間村仲筋、一九七八（昭和53）・十二・二〇建立、八重山遠見公園

「歌は昭和四十九年五月関西短歌連盟の金玉短歌に入選した垣花良香先生作品である。昭和九年に多良間小学校へ入学した同級生男子一同、先生の入選を慶祝し感謝をこめて歌碑を建立する」

昭和五十三年十二月

糸洲 朝章、運天 春宏、上原 泰靖、大城 常祐、大田 清工、垣花 常愛、垣花 清俊、川満 恵英、兼浜 寛吉、佐久本朝次、佐和田朝弘、下地 朝憲、多良間恵公、多良間朝公、富原 正夫、当間 清弘、当間 繁男、豊見山玄靖、豊見山常也、比嘉 正一、宮平 玄治、村吉 常男、本村 恵真、本村 恵信、与那覇 昇、与那覇昌一（五十音順）

垣花良香歌碑 2

むすびにし 愛のかたみよ 紅椿
故郷にかおれ 八千代ふるまで 垣花
一九八〇（昭和55）・一・一九建立、八重山遠見公園

垣花良香歌碑 3

黄金の夕日を浴びて 父と子が
小鰹一尾 棒につりゆく

一九七六年明治神宮春の大祭入選、一九八〇（昭和55）年建立、伊良部・佐良浜漁港

11、平良好児歌碑

まかがよふ 真砂の浜は 寂寞と
時の器を みたしつあり

平良定英（好児）、一九一一（明治44）・五・二〇生、一九九六（平成8）・四・一去、平良西里、一九九一（平成3）・六・二二建立、平良下里・カママ嶺公園

平良好児さんの歌碑建立計画趣意書

宮古が生んだすぐれた歌人、平良好児さんの格調高い秀作を顕彰し、その息の長い偉大な業績を讃えてこれを後世に永く伝えるため、この度平良好児さん歌碑を建立することになりました。

戦前から戦後を通じて約六十年間、平良好児さんは、一貫して文学活動に精励され、短歌・俳句を中心に幅広い分野に亘って数多くの秀作を世に送り、その格調高い作品群は内外から高い評価を受けております。また、平良さんは、宮古（沖縄）の土着文学の土壌を切り拓くとともに、自他共に等しく認める文学の「種蒔く人」として大きな役割を果たして今日に至っています。

戦前、若くして小説、詩、評論など幅広い活動を展開し、一九三〇年代には当時の琉球新報、朝日新聞の文壇で活躍します。また、戦後の荒廃で物質的かつ精神的な貧困の中で、平良さんは一九四六年に『文化創造』を創刊し、宮古の文化（文学）の灯を掲げます。

さらに、本土復帰翌年の一九七三年、総合文芸誌『郷土文学』を創刊、以来十九年にわたって季刊発行され、今年二月で七十号という大台の号齢を迎えます。この数字は、県内の同(個)人活動の中でも戦前戦後を通じて突出した画期的な記録として内外から注目されています。

―遠つ祖の血を流れし詩心を受け継いで土着文学の開花を目指す種蒔く人―

『郷土文学』創刊号の巻頭言に、このような決意と情熱を高らかに宣言した平良さんは、友人、仲間をはじめ多くの方々の物心両面に支えられて、その宣言を文字通り実行してきたのです。この間、平良さんは自らの歌集を五集まで発刊され、このうち『時の器』で沖縄タイムス出版文化賞、『息の緒』で沖縄タイムス芸術選賞の文学部門短歌の部で大賞を、それぞれ受賞されています。

本年五月二十日で平良さん八十歳を迎えられるのを記念して、この度平良さんの歌碑を建立し、そのすぐれた作品を永代に保存し、後世に広く伝えることになったものです。

宮古に在住する多くの郡民はもとより郡外、県外の方々がこの計画にご賛同いただき、基金造成に対するご理解とご協力を下さいますよう、心からよろしくお願い致します。

・(平良好児さんプロフィール)

一九一一(明治44)年五月二十日生まれ
一九四六年 「文化創造」創刊
一九七一年 合同歌集「ともしび」刊行
一九七三年 「郷土文学」創刊。黄胡蝶短歌会、麻姑山俳句会を

結成

一九七六年 沖縄タイムス芸術選賞文学奨励賞
一九八〇年 第一歌集「珊瑚の海」刊行
一九八二年 第二歌集「生贄は今」刊行、平良市文化功労賞受賞
一九八五年 第三歌集「時の器」刊行、沖縄タイムス出版文化賞受賞
一九八七年 第四歌集「茜差す昼」刊行
一九八九年 第五歌集「息の緒」刊行、沖縄タイムス芸術選賞文学部門短歌の部大賞受賞

・(所属)

短歌結社「地中海」同人、沖縄県歌話会会員、現代俳句協会員、自鳴鐘会員、宮古郷土史研究会員、平良市史編さん委員

・事業計画

「歌碑」建立・「第六歌集」の発行、記念誌発行、記念パーティ

・募金要項

(1) 募金内容、目的：平良好児さんの歌碑建立および記念事業、対象：全国、期間：平成三年一月から平成三年五月三十一日まで、ただし状況によっては期間を延長することがあります。

(2) 払込方法(略)

・平良好児さんの歌碑建立実行委員会

会長 宮 国 泰 誠
副会長 伊志嶺 亮・東風平 紀 子

事務局長 仲宗根 將 二

委 員 与 座 勇 吉・真栄城

功、仲元銀太郎・友利

敏子、奥浜幸子・宮川耕次、平良純子・砂川幸夫、下

地利幸

事務局 仲宗根將二、砂川幸夫、奥浜幸子、宮川耕次

平良好児さんの「歌碑」建立にかかる諸事終了報告並びに御礼
謹啓

皆様には御健勝のことと拝察致します。

おかげさまで平良好児さんの「歌碑」除幕式は予定どおり六月二十二日(土)午後五時から平良市下里在カマ嶺公園に八十余名の出席をえて挙行することができました。当日はあいにくの天候でしたが、何しろつゆとは名ばかりの日照りつづきに、二か月ぶりの降雨です。何かと不行き届きの点もありだったでしょうが、「恵みの雨」の感を深くしつつの除幕式であり、交流会ではなかったかとうけとめております。

地元からは好児さん、夫人の幸さん、御親戚をはじめ、多くの歌友とともに市の三役も列席、お祝いと励ましの言葉までいただきました。那覇からも遠路はるばる平山良明氏はじめ多くの歌友が出席、お祝いの言葉とともに歌の朗詠など、除幕式をいっそう意義あらしめていただきました。また、四十通近い祝電も御芳名を紹介することができました。当日の好児さん並びに御長男・聡氏のご挨拶にもありましたが、この事業を企画致しました実行委員会として心から感謝申し上げる次第です。

御承知のように「歌碑」所在地は比較的高台になっております。

平良市街はもとより、平良港から伊良部、池間も遠望できます。まだの方はおついでの方の折にでもお立ち寄りくださいまして、「まかがよふ……」に示された好児さんの、六十余年この道一筋の歌文芸の世界に身をおきつつ、宮古の文化について考えるのも、また一興ではないでしょうか。さらにこれを契機に、歌碑や句碑、彫刻などソフトラな記念物が一つひとつふえていく—そういう宮古であってほしいものだと思っております。

このたびは好児さんの「歌碑」建立にさいして、物心両面からお力添えくださいまして、まことに有り難うございました。重ねて御礼申し上げます。

これをもちまして好児さんの「歌碑」建立にともなう除幕式等諸事業の一応の終了報告と致します。

敬 具

一九九一(平成三)年六月

平良好児さんの歌碑建立実行委員会

追伸

除幕式にご出席いただけなかった方には、当日の、「しおり」を同封いたしました。

2 平良好児さんの第六歌集は今秋にも発刊予定です。

12・ 仲元銀太郎歌碑

豊原は 我が故郷ぞ 美しく
和み栄えて 永遠に幸あれ

仲元銀太郎(一九一一(明治43)・七・25生〜二〇一〇(平成22)・

一二・二六去) 上野・豊原、一九九六(平成八)年建立、上野・豊原公民館庭

13・谷川健一歌碑

みんなみの 離りの島の真白砂に

わがまじる日は 燃えよ花礁も 健一

谷川健一 一九二二(大正10)・七・二八生(二〇一三(平成25)・一二(平成15)・八・二四去、熊本県、二〇〇三(平成15)・一二・六建立、上野新里・太陽が窯敷地内

「ご挨拶」・谷川健一

このたび、佐渡山安公・政子ご夫妻をはじめ、会員の皆様の御好意で、宮古島の南の海を一望に見渡す高台の「太陽が窯」邸内に私の歌碑を建立することができ、心からお礼を申し上げます。建立に当たっては発起人代表の佐渡山正吉先生をはじめ、多くの方々のご協力があり、その数も百五十人余にのぼりました。「宮古島の神と森を考える会」「青の会」の会員やその他の有志の方々のご友情の賜物がなければ、この歌碑は夢想のまま、私の胸にとどまったことでありましょう。

かえりみますと、私が宮古島に足を踏み入れましたのは復帰前の一九六九年のことで、私の齢も五十歳に届きませんでした。それが今、八十歳を過ぎ老翁としてこの場所に立っております。その間、三十数年、私はまるでサシバのように毎年宮古島に通いました。そ

して昔ならば、常世びとの仲間に入る齢になって、本日のような慶事にめぐりあうことができ、感慨深いものがあります。

戦前の宮古島では年頭(にんつう)拌みという行事がありました。元日の朝早く、一家の老人が衣服をあらため上がり框や縁側に端座しますと、村の女性や子供たちが老人を礼拝しにやってきました。老人は盆の上に固めた塩を置き、その塩をひとつまみづつ、女性や子供たちの口に入れてやるのです。この塩を黄金塩(くがにまーす)と呼びました。このとき老人は常世びとであり、素朴でござかなその儀式は、常世びとがこの世の人に対する親愛にあふれた祝福だったのです。

私はこのような儀式を正月行事として行ってきた宮古島を心から敬愛してまいりました。その宮古島に年齢だけは常世びとにふさわしい私の歌碑が建つことは、かけがえのない喜びであります。

悠々たる先島の歩み。空と海にかこまれた大地に生きる屈託のない人々と喜びを分かち合いながら宮古島の浜辺の珊瑚礁の砂に、残りの人生を溶け込ませたいと願っています。

(二〇〇三・十二・六)

14・高沢義人歌碑

補充兵 我も飢えつつ 餓死兵の

骸焼きし宮古よ 八月は地獄

高沢義人 一九一三(大正2)・一〇・二四生(二〇一一(平成23)・一・二八去、福島県、二〇〇五(平成17)・八・一五建立、歌は一九八一年八月「朝日歌壇」選者近藤芳美氏により第一席、同年間秀歌

十首に選ばれた作、上野・野原

高沢義人歌碑建立趣意書

戦後六〇年、憲法九条を改悪し日本を戦争する国に仕立てようとする反動勢力が不気味な動きを強めてきています。こうした策動に対して「世界に誇る日本の宝、憲法九条を守れ！」という声も高まり、著名人九氏の呼びかけで「九条の会」が結成され、これに呼応して全国各地において「地域九条の会」や「分野別九条の会」が組織されさらに広がりつつあります。今や「九条を守れ！」の声は国民の多数になりつつあります。

宮古でも「九条の会」結成に向けてすでに胎動が始まっており、ふつつたぎるものがあります。その一つが高沢義人氏の歌碑建立の動きです。

「餓死兵焼きすてし具体語れと招かれて宮古歴教協に馳す夏の生き残り兵」 千葉県松戸市 高沢義人

この短歌は一九九八年六月十四日付け「朝日歌壇」に佐々木幸綱選の第一首、近藤芳美選の第二首に共通して選ばれた作品です。作者の高沢義人氏は現在九十二才で千葉県松戸市でお元気です。

一九一三年に福島県矢祭町で出生しました。一九三八年弁護士を志し働きながら中央大学二部法科を卒業したのですがその翌日（三月二十四日）社会科学研究会や唯物論研究会の活動が治安維持法違反とされ逮捕されました。以来三四五日間拘留され東京地裁より起訴留保で釈放されました。しかし、終戦まで保護観察法により自由を拘束されています。一九四三年には補充兵として召集され朝鮮・北満を

経て宮古に衛生兵として転戦してきました。輸送路を断たれて食料や医薬品の補給はなく、マラリアと飢餓のためバタバタと倒れ餓死する兵を茶毘に付す作業に明け暮れたようです。

そのような状況のなかで次のような短歌を詠んでいます。

- ・犬、猫、鳥、みな喰いつくし熱帯魚に極限の命つなぎたる島
- ・餓死兵を夜毎井桁に重ね焼くわれに一粒の涙なかりき
- ・屍焼く炎は赤くまた青く燃え尽きしあと迫りくる鬼気
- ・屍焼く炎消えればびようびようと夜通し吠えし東支那海
- ・将校に惨殺されし当番兵の妻には戦死とのみつげられき
- ・終戦間際兵舎に自殺せる軍医あり牛島中将はすでに然りき
- ・慰安婦の一人をつれて将校舎に夜毎通いき当番兵なれば
- ・餓死兵焼きし無残のほかは兵われの子らに語るべき何ものもなし

一九四六年に狩俣の前之浜から水戸市に復員帰還しました。一九四七年六・三制施行にともない水戸市の中学校で教師となり水戸市教職員組合の文化部長として活躍していましたが一九四九年レッドパージで教職を追放されました。そのような困難な状況にあっても日常生活のなかで短歌を詠み、一九八一年八月二日「朝日歌壇」に寄稿した、

『補充兵我も飢えつつ餓死兵の骸焼きし島よ八月は地獄』

は選者近藤芳美氏により第一席に選ばれ、その年の朝日歌壇年間秀歌十首の中に選ばれました。

それをきっかけに歴史教育者協議会宮古支部と高沢氏との文通が始まり一九九八年五月、五十余年ぶりに宮古を訪れました。その時詠んだのが冒頭の短歌であり、その他にも次のような作品があります。

・五十三周忌加害の兵を招きたる宮古歴教協の友情厚し
 ・敵襲苛烈の惨蘇る老兵に今も母のごとあゝ野原岳
 ・半世紀夢寐（むび）にも忘れ得ぬ戦友の墓に生き残り兵の長き慟哭
 ・兵の日の一輪の花「安芸田良子」の消息聞けば遠き幻
 ・極限の命の水の井戸桁に縋（すが）れば涙とどめなかりき
 ・帰らざる戦友の怒りぞ東平安名崎の怒濤は我を責めやまなくに
 ・宮古渚の珊瑚屑踏めばざくざくと亡き戦友の呻（うめ）くがごとし
 ここに紹介しましたように高沢義人氏の作品は、私達の反戦平和の願いを託すのに最もふさわしい作品だと思います。そこで、「高沢義人歌碑建立実行委員会」を結成して、宮古郡内をはじめ。県内外の皆さんにご協力をお願いするしだいです。

二〇〇五年四月吉日

高沢義人歌碑建立実行委員会

委員長 伊志嶺 亮

副委員長 友利 恵 勇

事務局長 下地 國 雄

幹 事 下地 康 夫、友利 定 雄、仲宗根 將 二、
仲地 清 成

実行委員 安谷屋 昭、安谷屋 豪 一、池 城 健、
池間キヨ子、上里 清 美、親 泊 宗 二、
上 地 洋 子、佐渡山 正 吉、下 地 和 宏、
下 地 利 幸、下 地 農、新城 勝 子、
砂川 博 明、砂川 幸 夫、照 屋 盛、

当真 清 利、長 浜 幸 男、長嶺 す み 江、
三 浦 春 彦、宮 川 耕 次、与 儀 一 夫、
與那嶺 達 男（五十首順）

8・15「高沢義人歌碑」除幕 平和の願いが光り輝くように…

「会報」一四九号で紹介しました千葉県在住歌人・高沢義人氏の歌碑は、予定どおり高沢氏出席も得て八月十五日、野原岳を間近に望む上野村字野原に建立、除幕式が催されました。刻銘された作品は、飢えと風土病マラリアにさいなまれた宮古での日々をうたった「補充兵我も飢えつつ餓死兵の骸焼きし宮古^{しま}よ八月は地獄」です。

高沢氏はさきの大戦末期の一九四四（昭和十九）年秋、三十一歳の補充兵（衛生兵）として「満州」から宮古へ移駐、およそ一年半軍務についたのち、敗戦で四六年二月郷里に復員しています。制海権も制空権も米・英軍の手中にあつて、輸送路を完全に断たれた当時の宮古におよそ三万の将兵が展開していましたが、武器・弾薬はおろか、食糧や医薬品も届かない。加えて連日の猛爆で野良仕事もままならず、民も兵も日々飢えと風土病マラリアにさいなまれ犠牲者の続出する日々であつたと伝えられています。

学生時代、社会科学のサークル活動で天下の悪法「治安維持法」によって市民生活を阻害されていた高沢氏にとって、宮古でのこのような極限の軍隊生活は、その後の生き方にいつそう大きな影響を与えたようです。復員後は再び教職に戻って民主教育の推進、ひいては戦後日本の真の独立、革新、反戦平和の実現に挺身しています。その傍ら教育者で歌人の岩間正男の影響もあつて短歌に親しみ、

「しんぶん赤旗」や『朝日新聞』の歌壇に発表してきました。作品のほとんどが、日々の活動を反映したものです。歌碑に刻された「補充兵我も飢えつつ……」は、一九八一年八月「朝日歌壇」第一席にも選ばれ、その年の朝日歌壇年間秀歌十首にも選ばれています。

除幕式は八月十五日午前十時、高沢氏と氏の中学教師時代の教え子二人―人見章太郎、木村芳、それに伊志嶺亮実行委員長、川田正一上野村長の五人によって除幕しました。このあと友利恵勇副委員長の開式のあいさつで日程に入りました。八月十五日は、さきの「十五年戦争」終焉の日です。戦火で尊い命を失った多くの民と兵の冥福を祈って一分間の黙祷を捧げたあと、伊志嶺実行委員長が「反戦平和の願いを託すには高沢さんの作品がもつともふさわしいと、三月から準備を進めてきた。高沢さんの平和を願う熱い心、思いを歌碑として宮古に建立できることを喜び、これを機会に宮古から世界の恒久平和を願っていきましょう」とあいさつしました。

下地国雄事務局長の経過報告につづいて、地元の川田上野村長が「反戦の熱き思いが込められた歌碑が建立され、地元としても喜んでいる。高沢先生の短歌に込められた平和の願いがいつまでも光り輝くように祈念する」と祝辞を述べました。高沢氏は「私の歌は宮古でなくなった四千人の住人と兵の恨みと嘆き、悲しみの分身です。この歌碑を原点にこれからも平和憲法を守る運動を展開し、死ぬまで反戦平和の歌をつくっていききたい」とあいさつしました。ついで実行委員の一人である立津和代さんが歌碑に刻まれた高沢氏の作品五首を朗々と披露、参列者の感銘を深くしていました。

式典を終えて交流会に移り、参列者一人ひとりが高沢氏の人柄と作品について語り、除幕式をいっそう意義あるものにしていました。建立場所は与那覇博敏氏の提供によるもので、席上、伊志嶺実行委

員長から感謝状が贈られました。

なお千葉に帰られた高沢氏から次のような歌が寄せられています。「心根やさしき宮古の友を忘れめや野原の歌碑のきらめく永遠に」「野原岳の野に建つ歌碑の除幕式ここにこそ足妻の妻立たせたきに」高沢氏は一九一三（大正二）年生まれの満九十二歳です。

（宮古郷土史研究会会報「一五〇号、二〇〇五・九・二九」）

15. 「えんどうの花」のふる里碑

金城栄治作「えんどうの花」のふる里、上野元新里小学校跡地（新里第二団地広場）、生家跡碑、平良西里市場通り、二〇〇八（平成20）・一・十九建立「セブンの会」

「えんどうの花」ゆかりの地に比嘉一雄医師ら「セブンの会」二つの碑建立

「宮良メロデー」の代表作の一つとして広く全県的に愛唱されている「えんどうの花」の作詞家・金城栄治を顕彰する碑が一月十九日、栄治ゆかりの地二か所に建立されました。一つは、平良・市場通りに面した旧琉球銀行宮古支店跡に歩道に面して「金城栄治生家跡」の標識、もう一つは、栄治が初めて教職についた旧新里尋常高等小学校（現上野小）跡Ⅱ現新里第二団地の県道沿いに『えんどうの花』のふる里」碑です。

二つの碑の建立は、平良・下里の開業医・比嘉一雄氏と同氏の平良中七期同期生「セブンの会」有志が中心になって、チャリティー懐メロ歌謡ショーを催すなどして資金を造成したようです。「えんどうの花のふる里」碑の除幕式には多くの関係者が参列して比嘉医師と金城栄治の甥金城昭夫氏（南城市在）、伊志嶺亮宮古島市長、新

里玲子同教育委員長の四氏が除幕しました。比嘉医師は「映画「えんどうの花」をみて、金城栄治の碑を建てようと思い立ったいきさつや、同期生の協力で実現できた、これで八十四年ぶりにようやく金城先生が宮古に帰ってきた思いがする」などと挨拶しました。また、伊志嶺市長は「記念碑が金城栄治ゆかりの新里小学校跡に建立できてよかった。これからもえんどうの花を愛唱して、この碑も皆で大切にしていこう」と祝辞を述べ、金城氏は「全国的な詩人が宮古にいたことを誇りに、文化の向上にもつながるのではないか。皆の協力で建立できたことを伯父も喜んでいる、と思う」と御礼の言葉述べていました。

金城栄治は、一九〇三（明治三十六）年、平良・市場通りの那覇からの寄留商人の子として出生、一六（大正五）年三月、平良尋常高等小学校（現北小・平一小）を卒業しています。郷土史家の故下地かおる先生は同期生です。二年三月、県立第一中学校（現首里高校）を卒業して新里尋常高等小学校に代用教員として教鞭をとっています。六年生の担任で、引き続き高等科一年生の二学期まで受け持ち、新設の宮古教員養成所（二年制）に転勤しています。新里小の教え子の一人故仲元銀太郎先生は、歌詞に込められた思いを考察しつつ「えんどうの花は、（金城先生）去った新里に対する総合的情緒の表現」と受けとめられておられます（『師走に』『郷土文学』三八号・一九八三）。栄治は二四年、大宜味村の塩屋小に転勤していますが、そのさい師範学校で音楽を教えていた宮良長包に詩を託したのではないかとみなされているようです。「えんどうの花」の作曲は同年六月になっています。

栄治はその後、羽地村稲嶺小をへて今帰仁村天底小勤務中の三〇（昭和五）年、二十七歳の若さで亡くなっています。

〔宮古郷土史研究会会報〕一六五号、二〇〇八・一二・十六

貞明皇后歌碑

つれづれの友となりても慰めよ
ゆくことかたき我に代りて

一九四二（昭和17）・十一・十三建立、平良島尻・国立療養所宮古南静園

昭和天皇歌碑

わがふねにとびあがりこし飛魚をさきはひとしき海を航きつつ

二〇一一（平成23）・八・七建立、平良西里・宮古神社境内

おわりに

地元二紙はじめ県紙も文芸活動を積極的に扱っており、この面からも将来すぐれた俳人・歌人が生まれ、「文学碑」建立へと発展することが期待されます。

戦後、宮古を代表するような民謡碑なども幾つか建立されています。「民謡のふる里（舞台）めぐり」などで紹介されているようです。

「はじめに」にふれた中学生の「句碑」は次のとおりです。

・池間中学校生徒の俳句（池間大橋欄干）

島の子の 夢たくす橋 開通へ 仲原 利和
湿原に 羽音を残す 渡り鳥 新崎 政和

漁に出た 父を迎えに 十三夜
渡る日は もうすぐそこに 海の橋

佐渡山久美
仲原 京美

・鏡原中学校生徒の俳句（校内中庭）

台風や 島中タイム スリップす
キビ刈りの 甘い香放ち 母帰る

平良 紅林
砂川 桂

・上野中学校生徒の俳句（校庭）

運動場指揮台一つ秋の暮れ
台風やドミノ倒しのキビ畑
手作りのゆかたに母のにおいする
シヤコ貝が青空向かって大あくび
鳥の群れ秋を連れて里帰り

渡真利紳吾
志喜屋正子
渡真利翔子
真栄里裕希
平良 勇人

